

『浜松中納言物語』における〈渡唐体験〉考

——見聞する主人公中納言についての唐后 『源氏物語』〈引用〉の検討からの視座——

松浦 あゆみ

平安時代後期の渡唐物語『浜松中納言物語』において、主人公中納言の唐后思慕は、彼の渡唐体験の中核かつ作品全体に及ぶ主題的展開として、(散逸巻に次ぐ現存)巻一で渡った唐土での垣間見や後の正体に気づかないままの一夜の逢瀬等を初め、帰国後の巻二以降、転生夢告や現世の死を知らせる消息を受け取るに至るまで様々な面から論じられている。

本稿では、この唐后を取り巻く唐土の後宮事情、彼女の「本体」出資や生い立ち、美質をめぐる巻一の渡唐時の叙述とこれを見聞する中納言の以降の関わり方を中心に検討し、唐后思慕のとらえ直しを図る。その際にまずは後宮事情と見聞する中納言における『源氏物語』〈引用〉に注目する。光源氏とその前史及び薫についての各〈引用〉——かつてはこの正統両篇の主人公や各相手の女君をむやみになぞったものと批判的に指摘された個々の特徴——を、相互の兼ね合いから検討し、『浜松中納言物語』独特の作品構造や主人公と唐后双方のあり方に考察を加える。

一、唐土の後宮事情と見聞する主人公における

『源氏物語』〈時代差〉引用の意味

唐后を取り巻く「もろこし」「からくに」唐土の後宮事情は、巻一初めに後の「髪上げうるはしき」装い、「あひいみじくにほひかをりて、眉も」のより気高く見なしたまふ」美貌と「世に知らず聞こゆる」琴きんの琴こと弹奏

を中納言が初めて垣間見て恋心を抱いた菊見の場面(P 158～161、小P 40～42)の後に、後述「本体」に続き地の文で述べられる。唐后が唐帝に寵愛された状況は、後宮で一の后の他に「今一人の后、十人の女御」の「あまたの人にのろはれ」た際に「楊貴妃といふ昔のためし」帝の寵愛を恣にした同じ唐土の先例に喩えられ非難される。しかも、唐后の父秦の親王が娘への他の后妃の圧迫に嫌気がさし大臣を辞任し山寺に籠居し、唐后も離宮住まいを余儀なくされる(P 162、小P 44～45)。一方、唐帝が唐后に中納言送別の宴で弹琴を迫る際に、「世の乱れ出で来む事」も顧みずに一の后所生の(おそらく一の)皇子が既に立坊している下で唐后所生の三の皇子に帝位を譲る約束をする(P 158、小P 97)。先にも後の父に意思を伝えており(P 184、小P 76)、新たな政治的「乱れ」を呼び起こす決定である。他の后妃による唐后圧迫の様は、見聞した中納言も、帰国九ヶ月後に唐后の美質を断片的に日本の当帝(以下、当帝)に語り公的な場で披露した(御前の唐語り)で「楊貴妃などのやうに、時めきおぼされながら、一の后をはじめ、あまたの御方々にそねみうれへられて(後略)」(P 310～311、小P 265)とやはり楊貴妃の先例に喩え簡略に語っている^③。

ただ、諸注・諸論で指摘される通り、他の后妃の圧迫を強調する点において、「後宮佳麗三千人 三千寵愛在一身」(長恨歌)と他の后妃等の数に比べての寵愛が強調される楊貴妃そのものよりも、先行して「楊貴妃のためし」を引いて描かれた『源氏』始発部の桐壺更衣への帝寵及び

周囲の辛い仕打ち（桐壺一・P 18（20）⁵）を更に強調する形で（ただし、桐壺更衣が死に至る環境を唐后は逃れ隠棲する展開へ変奏されて）⁶描かれている。唐帝が三の皇子に帝位を譲る表明にしても、『源氏』で二の皇子（光源氏）立坊を望んだ桐壺帝が立坊を思いとどまらない発展形へと変奏しているとも考えられよう。

対する見聞者中納言が身を置く国「日本」「日本の本」では、政争は見られない平穏な政治事情である。巻五の作品末尾近くで春宮（新編全集・全注釈で『源氏』の故前坊同様に当帝の弟か甥と推定）が即位しないまま亡くなる事態こそあれ、その春宮亡き後は当帝の嫡子で中納言の恋敵の現式部卿宮が立坊する点では、今上帝の治世で二の皇子式部卿宮ばかりか薫の恋敵の三の皇子匂兵部卿宮まで坊がねの皇位継承事情（諸説有）の『源氏』続篇に準じた状況だろう。⁷しかも、薫が（兄）夕霧や冷泉院に重んじられ、恋敵はいても表立った政敵は不在の立場も、『浜松』の中納言は高官を縁戚に持つ点（父式部卿宮を亡くしたとはいえ母方が摂関家・継父が左大将）からすれば、散逸巻の詳細は不明とはいえ当初からなぞつてよう。『源氏』宿木巻で今上帝が殿上の源中納言薫を召して女二宮降嫁を仰せた場面を、『浜松』では帰国後の巻三における当帝の皇女降嫁の仰せ及びその発端前述（御前の唐語り）の冒頭で殿上の「源中納言」を召す場面（P 309、小P 263）で踏まえており、「あまた」ある皇女の一人で女御所生（P 314、小P 269）の降嫁に過ぎないにせよ、当帝に囑望される若年高官の恵まれた立場と連動させなぞった結果と考えられる。この点では四十で朱雀院女三宮と結婚した準太上天皇光源氏より近い。当該巻一の渡唐に関しては故郷に帰るのが困難な須磨・明石へ退居した光源氏を場面共々なぞりながらも、「二位の中納言」（P 176、小P 65、位階の記述はこののみ）のまま渡唐した彼は、渡唐前に当帝へ「三年が内に行き帰るべし」と奏上したとの回想（P 193、小P 90）からすれば渡唐の勅許も得ていよう。高官位

を失った（諸説あり）光源氏のような復帰の必然性を生じる不遇さはない。この状況下で、禁欲的な薫型主人公の特徴は周知の『無名草子』評以来現代の諸注でも様々な指摘があり、巻一も唐后の隠し子若君出産から真相判明に向かう時点の来訪場面に至って『源氏』橋姫巻・早蕨巻・東屋巻の薫の美的描写がなぞられる点は注目を引く。その人物造型継承に密接に関わるのが、諸論で指摘の家庭的に満たされない苦悩と孝養の志の継承でもある。散逸巻での父宮の死去・母の再婚をめぐる思いは現存巻で断片的に窺えるのみだが、薫の出生と孝養の苦悩を引き継ぎ孝養を実現した形になる。即ち平穏な政治事情下の恵まれた地位の価値自体が相対化された結果が、作品全体の傾向として論じられる通り、京中心の現世的な欲望に背を向けての奥山み吉野への遁世志向であり、端的な表れが、薫ですら了承した皇女降嫁の仰せに対する辞退に違いない。⁸

ただしその一方で、薫が宇治に隠棲して勤行に励む八宮の「俗聖」としての生き方に憧れつつも、宇治八宮のように貴族社会の栄達からの半離脱もし得ないあり方もなぞった形である点を本稿では確認しておきたい。帰国後の巻二末の時点には中納言は大将大君と日々勤行に励んでおり、「行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず」（橋姫五・P 128）という薫のような不満があるわけではない。それでも、巻四のみ吉野での唐后母の服喪に伴う忌み籠もりでも「わがかく公私忘られて」の行いと思ふ中納言の心情（P 339、小P 305）は、自然と忘れていると思いつつも日本の貴族社会に身を置く前提であろう。

こうした唐后・中納言双方の特徴は更に重視する必要があるのではない。なぜならば、唐后をめぐる後宮事情は、異国での全く新しい見聞というよりも、中納言がなぞる『源氏』の薫の時代にとって（前代）（正確には三代前である桐壺朝）であり、薫にとつて名義上の父光源氏の母が置かれている状況（を更に極端にした設定）なのである。中納言が唐土へ

渡ったのは、亡き父式部卿宮の転生である唐帝三の皇子と再会するのが当初の目的だが、その旅——異郷を感じ京の日常生活や逢瀬を含む異郷訪問をとらえ直す意味合いで薫の〈父〉の須磨・明石退居をなぞる旅——により父宮の転生三の皇子の母后が身を置く〈前代〉かつ〈父の子供時代〉へとある意味では遡って見聞する結果を招いたのではないか。禁欲的で遁世志向はそのままながら、自身の環境とかけ離れた〈前代〉には起り得た動的な状況へ招き寄せられるのだろう。唐后をめぐる不安定な政情を中納言が見聞する意義とは、平穏な日本の現環境における彼の恵まれた立場に深く根ざすものであろう。

次に、この後宮事情を見聞する中納言の実際の心情と言動を、引き続き『源氏』引用のあり方から見ていこう。

二、唐土の後宮事情・唐后との密通に対する客人としての意識と光源氏の〈体験〉

日本の高官である中納言は、唐土では日本からの客人の立場のまま、つまり唐土の倫理・法律に縛られないまま距離を置いて見聞している。唐后が逢瀬で懐妊し密かに出産するために蜀山に籠もった時点で、彼は「雍州の内裏」の「ほうか殿」における七月七日宴の作文・宴遊に列席した際に、逢瀬の真相を知らないまま、唐帝に対し次の推測をする。

この帝、御かたち心なまめきて、遊びの道に心を入れ、強くさかしき方は後れてやものし給ひけむ、一の大^臣、后たちに、よろづ劣り首たれて、さばかり御心に入れておはせる河陽県の後を、跡絶へてものし給ふは、強き所ぞおはせざるべき、と中納言はをしはかり給ふ。(P 187、小P 81～82)

河陽県の離宮から今回さらに内裏から遠く離れた蜀山へと「跡絶へて」

籠もってしまったと聞く後宮事情の背景に関わり、唐帝が、他の后達や一の後の父である一の大^臣に「よろづ劣り首たれて」頭が上がらないで、「強くさかしき方」の少ない性質ゆえと中納言は極めて率直に「をしはか」つている。一の大^臣については、早い段階から地の文での紹介で「恐ろしき人なり」と唐后入内を当初は固辞した後の父の言葉として語られてはいる(P 162、小P 44)が、おそらくは父三の皇子からの情報により(浜松の会注)、中納言本人も既に娘五の君との対面を頼まれた際には「いと恐ろしと聞きしあたり」(P 172、小P 59)と激しい異国の権力者の怖さを意識する。その延長上で山陰の逢瀬後の当該時点に至って更に明確な批評性を発揮した推測であろう。後宮勢力に圧されるとするこの唐帝評は、宮田和一郎氏(注①論文)や浜松の会注が既に指摘する通り、『源氏』の「若うおはしますうちに、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし」という朱雀帝の〈弱い〉性質(賢木二・P 104)をなぞっているが、叙述の視点において大きな違いを見せる。『源氏』の場合は、同様の描写の須磨巻共々地の文における〈客観的〉な叙述であり、その後の対面で父院の面影を見出し慕う光源氏本人の心情(賢木二・P 123)とは明らかに対照的である。前掲の中納言の場合は、唐土の統治者たる唐帝を客人の目から相対的に批評していよう。この宴遊では、蜀山に籠ったままで逢えない后を唐帝が思いを馳せ『長恨歌』の詩句を誦す様子に、再会が困難な帝と寵妃の転生後における再会の願いを察し、自身の恋情と相まって共感し和歌を唱和しており、后と恋をする主人公として相応しい中納言の見る〈力〉を形成しているのであろう。

この時点に先行する春三月、唐后の正体に気づかないままの逢瀬は、実際の行為としては、光源氏と藤壺をなぞった后との密通で唐土の皇権を侵すものであり、光源氏以上に宿世Ⅱ運命の予言により正当化され、美貌が絶賛される主人公として超越性が示された形であろう。また、密

通による子の誕生で「そら恐ろし」と罪意識を感じる(大系解)のは元来『源氏』で諸論の指摘する通り光源氏よりも藤壺に偏っており、『浜松』でも菊池仁氏(注⑩論文)や新編全集注、浜松の会注が指摘する通り、唐后及び後の腹心の女房が専ら痛感する。

ただ、后が身を置く異国唐土の政治的不穏さを増す可能性を作りながら実感することなく真の当事者となり得ないまま唐土滞在を終える中納言のあり方は、既に指摘の通り后を犯す禁忌のなさが明らかである。密通による懐妊が発覚すれば桐壺更衣や藤壺の場合以上に激しいと思しき他の后妃の迫害で身を「いたづらに」なすのではと唐后が恐れる政治状況(P183、小P75等)と、中納言が抛り所にする日本の平穏さとの差は、藤壺に密通する光源氏と異なり依然際立つだろう。確かに中納言は正体不明の女と逢瀬を自ら欲して結び、その「春の夜の夢の名残り」を訪問時に御簾越しの後の芳香に感じ愛執に苦悶し続けてはいる。だが、後の正体を知らない彼には唐后を窮状に置く自分の行為を自覚できない点では十分(体験)し得てないともいえる。光源氏が一夜の逢瀬後素姓と行方の知れない朧月夜を慕う歌と状況をなぞり「春の夜の月のゆくへを知らずしてむなしき空をながめわびぬる」(P185、小P79)を詠むなど真相を知らないゆえの恋へ変奏されたためである。とはいえ、後の正体が判明後にも母宛の文箱を預かった帰国二日前の贈答歌でさえ、夢かと感じる密通の儂さを詠む光源氏・藤壺の贈答歌(若紫一・P231)を『伊勢物語』六十九段共々継承する点は両者同じ(浜松の会注)でも、唐後の返歌「夢とだに何か思ひも出でつらむただ幻に見るは見るかは」が密通に自覚的・否定的な捉え方なのに比べ、中納言の贈歌「ふたたびと思ひ合はする方もなしいかに見し夜の夢にかあるらむ」は一夜の逢瀬ゆえ后が相手と「思ひ合はする方もな」く実感しかねる心情だろう(P211、小P116)。

もちろん、彼もこれより先に後の正体を知った際は、唐後の密通発覚

により政情の乱れる事必定の「恐ろしかんめる知らぬ世」恐ろしい異国唐土での重大さに思いを至らせる。

かばかり恐ろしかんめる知らぬ世に、「げにいささかも事の聞こえ出で来なば、わがため人のため、いみじう便なかるべきことぞかし」(P206、小P108)

つまり前述の後宮事情により密通発覚の場合に自分も「人」唐后も「便なかる」迫害を受けるに違いないと考えて、後の拒絶を受け入れ再度逢うのを思い留まる。結局、「この世の人に思ひおとさるる違ひ日」が自分の物思いをきっかけに生じる恐れも想定しつつ、日本に母や恋人大将大君を置いて「たけう漕ぎ離れ」渡唐した旅を振り返り、帰国を決行している(P207、小P110)。后への未練に悩まされつつも中納言を律するのはやはり無理を押しして離れた母国日本へ帰国する義務感であり、唐帝への禁忌や異国唐土に留まり唐后と関わり続ける事ではない。后との恋を十分(体験)し得ないのは客人の立場ゆえでもあろう。

以上、『源氏』(引用)の検討を通じて、恵まれた政治的立場の薫をなぞる中納言が平穏な政情の日本から父の転生を訪ねて渡唐することで、あたかも薫が時を遡って(父)光源氏の母のいる『源氏』桐壺朝後宮を(体験)したような形になること、それに比して実際の意識としては唐后を苦しめる後宮事情を、光源氏をなぞった逢瀬の意味も自覚し得ないまま客人として見聞し続けるあり方を確認してきた。その中納言が後の正体を知った後も唐后との再逢瀬を待つ気持ちを抑え帰国する心情からは、眼前のものよりも遠くのものにあくがれる心性や父母への各孝養の葛藤^⑪を読み取れる一方で、日本の事情に律された客人としての立場が窺える。更に、前述帰国を決意する心情では唐土で唐后に関わり続ける欲求を抑えるのに、「かばかりに思ひ立ちぬる道を、心弱くとまるべきか」と思ひ立ちしは、かかる契りのありけるにや。」(同頁)と渡唐の意義が

「かかる契り」若君を生した他ならぬ唐后との逢瀬の宿世にあると考えた点も特徴的である。この宿世重視の傾向を考慮する時、唐后の「本体」出自や生い立ちと帰国後に及ぶ中納言の見聞は注目される。

次節ではこの点に限り、主人公の心情と未分化な地の文の叙述も考慮しつつ概観する。

三、唐后の「本体」見聞から見出された中納言の宿縁

唐后の「本体」出自や生い立ちの話は当初、巻一において前述後宮事情に先行する地の文での叙述である。日本にて日唐各国の皇族の母・父から生まれ、母と幼時に別れて父「秦の親王」に連れられ唐土へ渡るに至る一連の経緯が巻一の早い段階で唐后の苦難いわゆる〈流離〉として述べられる。それだけでなく、既に論じられている通り帰国後の巻三に及んでは唐后の母吉野尼君の苦難という観点からその出自・先夫「秦の親王」との結婚・子別れをめぐる詳細、後夫との契り・隠棲と剃髪・吉野姫君出産・み吉野隠棲の境遇に至る現在までが母尼君の〈流離〉として新たに吉野聖の話と地の文で語り直されている。¹⁹⁾

その「本体」をめぐる時代性に関し確認しておく。巻一では唐后の母の父である日本の「筑紫に流され給へりける皇子」(P 161, 小P 43)が、配流の事情は不明のまま巻三で吉野聖の話で「上野宮」と明かされる(P 266, 小P 202)。「上野宮」は『源氏』宿木巻の前述薫が女二宮降嫁の仰せを受けた発端場面にも点描され(『浜松』巻三当該箇所における新編全集指摘)、殊更の前代性は帯びないのだろう。ただしその反面、『うつほ』の「古親王」上野宮や、『源氏』でも「世に数まへられたまはぬ古宮」宇治八宮(橋姫五・P 117)が朱雀朝の弘徽殿太后らの十宮(冷泉)廃太子を企む政争に巻き込まれた末に不遇の身となった過去を想起させ(新編全集でも立坊

擁立を推定、『浜松』の中納言が身を置く時代より〈前代〉の劇的な事情に設定されているよう。同様の筑紫に端を発する女君の〈流離〉として比較される『狭衣物語』²⁰⁾で「親たちみな筑紫にて失せにける」と語られる飛鳥井女君の父「帥の平中納言」(小学館新編全集『狭衣物語』¹⁾巻二(深川本・P 249)の場合は平惟仲(長保三年(一〇〇二)〜寛弘二年(一〇〇五)在任、太宰府で没)を踏まえたものと近年指摘されるが、『浜松』における唐后の祖父の方が不安定な皇位継承事情を想起させる皇子の流罪という点、しかも巻三は中納言にとり〈父〉の母の母尼君の来歴に遡って語り直される点で更なる前代性・悲劇性を強調されている。中納言は巻三で「鳥の音だに、世の常なるは聞こゆべうもあらぬ世界」京とは隔絶された奥山み吉野(P 264, 小P 200)に旅する意味合いの他に、渡唐時以上に時代を遡る追体験をすることになる。

唐后の「本体」をめぐるこの叙述に関しては、共鳴する見聞者としての中納言が顕著である。これらの事情が中納言に語られたと初めて明記されるのは、同じ巻一でも(読者に対し)最初に地の文での叙述で明かされた時からかなり後、前節で論じた唐帝をめぐる見聞と同じく、后と逢瀬を結んだものの正体を知らない時期にあたる。中納言は、後の隠棲する蜀山を訪れた際に唐后の父大臣が「この後の御母に別れしほどの事など語り出でたる」のを「いみじうあはれなり」と聞く(P 191, 小P 86)。逢瀬の相手が后と知らされた後で帰国直前には后本人からも、母宛て文箱を預かった際に「身のありさま、をのづから聞きたまふやうも侍らん。」と切り出されて日本にいる母の事情を聞いてもいる(P 209, 小P 114)。この在唐時の見聞及び文を預かった経緯や先行する地の文の説明が、帰国半年後の巻二末以降に唐后とは日唐に別れて暮らす母吉野尼君と異父妹吉野姫君に関わる「本体」の詳細を中納言が後の文開封と吉野行きで見聞きする際に、一体化する。その際、唐后の文箱を届ける巻三初めの吉

野行きでは、吉野聖がみ吉野に隠棲する母尼君の「本体」や唐土で后として「飾り据ゑられ給へる」娘唐后との宿縁を「聞き所多く」語り聞かせるのを、日唐両国の母娘の「この世にめづらしくありがたき御契り」に「聞くもいとあはれに」覚える様が描かれる（P 266～268、小P 202～205）。「聞き所」の語句は卷二末で唐后の弾琴を評価する際に続き用いられる注目すべき評語であり、母娘異なる意味合いで耳新しく聞く価値を認められている。③。今度は地の文だが、聞き手中納言の心情に重なる。「あはれなり」の反応は視点人物的で簡単な感動とも見なせるが、見聞に距離を置かず共鳴する、言い表し難い心情だろう。こうして中納言と后の異父妹姫君の接近が唐后から母尼君への孝養の宿世と夢告により導かれ、正当化される枠組みへ繋がる。④。同時に、中納言にとっては自身の境遇と隔たった母子流離・孝養の物語を見聞き共鳴する行為こそが〈体験〉の中核となつていのではないか。

しかも、唐后と尼君の母子愛の見聞に先行し、后の文開封で后の二人の子——中納言の父の転生である唐帝三の皇子、中納言との隠し子若君——を介し中納言が当事者となる感動が加わり、唐后から母へ、中納言から父三の皇子への孝養の志が絡み合う。つまり、『源氏』の須磨・明石退去と恋の物語展開を承けた恋や孝養の宿世のとらえ直しによる融合の進行であり、母恋いの面影と子別れの悲しさとの連鎖でもある。⑤。

三の皇子については、諸論の指摘通り三の皇子個人としてみる限り、中納言と〈再会〉した後は言及が少なくなるが、三の皇子が語る父子の宿縁が母唐后の親近感呼び起こし結果的にはより密接な縁々逢瀬を結ぶ展開を呼び起こす出発点となつている。それは単なる恋のきつかけに留まらず、卷一末で預かり卷二末で中納言に開封される母尼君宛ての唐后の文にも反映されていよう。中納言と三の皇子の父子の縁を明かした上で「この中納言、宮を世の常ならずいみじう思ひきこえさせ給へるゆ

かりに、ゆめゆめをろかには侍らじ。」と「宮」三の皇子に対する中納言の孝養の志を后自身の縁と感じ、母に對しても「おのが身を代へて渡りたると思しなして、よろづを頼み思しめせ」即ち后自身の転生とも思えとまで信頼の意を表している（P 259、小P 190）。中納言と三の皇子における父子の縁を唐后と三の皇子、更には自身と母尼君との母子の各縁に重ね「この世にもまたその世にもあらじかしかかる親子の中の契りは」と「親子の中の契り」を融合してとらえ直していよう。これを読む中納言の反応は「すべてかきくらし、いとどしき涙」に昏れ、み吉野で尼君の「本体」を聞く前から既に、言い表し難い思いに感動している（P 260、小P 191）。

一方の若君については、その唐后の文においては母にも表立つて出生の秘密を明かさないうで、異父妹宛の文に「思ひすつまじきやう」があるゆえ「なつかしうおほせ」と頼むに留まる（P 261、小P 192）。ただ、卷一では既に中納言が真相を知り日本に連れて帰る心積もりを伝えた時点で、唐后は若君を手放す悲しさを、幼き日の后が母に味わせた子別れの悲しさの「ことの報い」と考えている（P 208、小P 111）。この時点では唐后が母と関連し若君との別れの宿縁を思い悲しむ心情と対照的に、中納言は宿世に樂觀的な形で若君誕生による渡唐の意義や離唐後の期待を感じている。父との〈再会〉目的の渡唐体験をとらえ直し、唐后との一夜の逢瀬で若君が誕生した宿縁即ち「この契りにひかれにけるにこそ」と「掻きくらしつつ」感動し（P 203、小P 105）、また帰国を決断する（前節末言及）一方で帰国二日前には唐后と簾越しの対面・歌贈答直後には若君ゆえ「我をばひたぶるに思し放たぬなんめり。」と帰国後の望みをつなぐ心情（P 212、小P 118）になる。それが卷二末で妹宛で若君を頼む后の文を読む際は、やはり「身に染み返り、あはれにかなしとは世の常なり」（P 261、小P 192）と言い表し難い思いを抱き、み吉野出発時にも若君を「我が

方ざまに」と頼んでいたのを思い出し「涙とどまらず」と感動を蘇らせた後は、「われをも何とも思さずとも」再会不能に近い若君を思う唐后の心を「思い遣るかなしき、せむ方なし。」と自分と三の皇子の父子の宿縁と重ねつつ「あはれはるかに隔たり、夢のやうにて別れたてまつりにし」后への思慕を募らせる。日本での実生活では、継父左大将との不和を渡唐直前の彼の娘大君との逢瀬をめぐる混乱により更に深めていたのをこの時点ではほぼ取捨しているが、円満になればなる程、家庭的に満たされない唐后の宿縁と比べているのである（P 307、小P 260～261）。

以上、渡唐による父の転生三の皇子との〈再会〉が、新たな縁を生む媒としてその母唐后との逢瀬及び若君誕生を導き、唐后の「本体」説明で帰国後に詳述される吉野尼君・姫君との親子の宿縁の片端に中納言も三の皇子・若君との繋がりを介し連なるのを、彼自身宿縁として確認する経緯を概観した。この中で、巻二末で開封された唐后の文が特に、文を読む中納言を融合した宿世として、思慕のあり方共々とらえ直す事へ導く点は注目される。唐土では客人としか実際に振る舞いようがなかった中納言が、文に綴られる唐后の思いに絡め取られる形で、唐后の祖父上野宮〈前代〉に起因する「本体」を見聞し、后と母尼君親子の宿縁を日唐で隔たる流離の宿世と捉え返す中で、三の皇子や若君を介し自ら連なり得た事に「あはれにかなし」と語り得ない感動を覚え、再会が叶わない唐后への愛執を再構築していよう。²⁶ 地の文の叙述や文に未分化な形で考え見聞するあり方なのである。

以上の唐后の現在と過去に対する見聞者中納言の関わり方には、次節で概観の、帰国後の京の日常生活で彼女の比類ない美貌と弾琴を語り草として意識する経緯が絡んでいる。

四、唐后の美質を語る価値をめぐる葛藤へ

一節冒頭で掲出した「髪上げうるはしき」唐后の「あひいみじくにはひかをりて、眉ものより気高く見なしたまふ」美貌及び「世に知らずぬこゆる」琴の琴演奏は、菊見の姿を垣間見た時以来、中納言が「名残の匂ひまでわが身にしみぬる心地」「おもしろささへ耳につきつつ」と極私的な恋情の対象となるが、それは「この世にかかる事を見るや」と唐土での見聞として最も注目すべき事柄ゆえでもあった（P 158～161、小P 40～42）。

ただ、中納言のこうした私的な思い入れに留まらず、唐后の美質が唐土を代表する美として意識される経緯も注目される。中納言帰国の時点に至り後の正体を知る契機となった未央宮の送別の宴で、一節前述「世の乱れ」の危険を冒し唐后弾琴を企てる唐帝の心情は見過ごせない。類い希な中納言が唐土で「めづらしう聞きも見も驚くことなくてやみぬる」と帰国後思い返す事になるのを「はづかしかるべき」と思い、唯一「驚き思ふ」価値があるものとして中納言に唐后の「かたち、ありさま、琴の声」を見聞かせ「我が世の思ひ出でに思はせむ」と企てる（P 195、小P 93）。実現した「空に響き上り聞こゆ」弾奏に、中納言は逢瀬の相手との同一性を感じ、正体を見定める行動を起こすまでに恋心を募らせつつ、先行物語『うつほ物語』で奇瑞を招いた俊蔭女の弾琴も「かうはあらずやありけむ」と比類なさを準え、「さらに涙とどまらぬ」感動を覚える。その様子を見た唐帝は、（唐后との逢瀬の真相は知らぬまま）中納言の美貌・才と併せて「わが世に、かくめづらしきことを見聞くよと、世のためしにも書きとどめ、語り伝へつべく思しめさる。」と後世へ書き語り伝えるに相応しい価値を再確認し満足するのである（以上P 200、小P 99～100）。

中納言が唐后の容貌と弾琴について語る価値を意識するのは、唐土か

ら帰国半年後の時点、卷二末尾近くである。唐后の「菊見たまひし夕べの御かたち、琴の音ばかりなど」を、唐土で見聞した体験の中でも「いみじう聞き所ありて」聞き手を感動させるにふさわしい「語りたまふべき物語」として価値を認めているにもかかわらず「心のうちに深く残したまひて」、「尼姫君」剃髪後も関係を修復し正妻格として寝起きを共にする大将大君に、「この世の事もかの世の事も」日本ばかりか唐土の体験すら何もかも隔てなく「長き寢覚めに」話す中でも、「まづ先に立つ涙に慎まれて」全く言い出せないでいる（P 254、小P 185～186）。この心情をきっかけに、中納言が帰国二日前に唐后から託された件の文箱を開封し、吉野行き及び後の異父妹吉野姫君の登場へつながる。吉野姫君との直接の対面がまだ実現しない巻三半ばで、前述〈御前の唐語り〉をきっかけに、京の日常生活から離れた次元で菊や春の夢に託された観念的な唐后のイメージによる思慕へと没入する。

このように、一流の批評者である客人中納言に唐帝が対抗するため、唐后の容貌と弹琴を唐土で世に伝えるに相応しい美質として披露し、中納言も帰国した日本で語り伝える事を意識し私的な思慕との間で葛藤を覚える物語展開が窺える。帰国後の中納言の唐后思慕をめぐる主題的展開にも密接に関わっている。その思慕のあり方は、帰国直後の筑紫や帰京後の日常生活における変化について以前の各稿で論じた通り、中納言が語るのを躊躇う事又は言いつくろう事そのものである。加えて、本稿における以上の検討を考慮した場合、その躊躇いには、異国の後の美質への愛執というだけでなく、特別な唐后をめぐる特別な親子の繋がりを含む一切を、唐土にて客人の立場だからこそ得た見聞の中から中納言自身が組み込まれ得るものとして求めていく恋着が認められるのではないか。

最後に中納言にとっての唐后に関わる見聞の意味合いを彼の渡唐体験

全体から考える。

五、〈前代のゆゑ〉の見聞という〈渡唐体験〉

唐后に関わる見聞は言うまでもなく、渡唐した数少ない日本人である中納言の見聞における唐土の人・事物の一部である。そもそも中納言の渡唐は、亡き父宮の転生である唐帝三の皇子と〈再会〉するというあくまでも私的な来訪であった。客人である中納言は唐土の宮廷生活面で唐帝の招請があれば、「とうてい」の行幸や「ほうか殿」における七夕の宴の儀式等に加わるものの、日常的な参内の義務はないと思われる。結局、父式部卿宮の転生たる三の皇子との再会、中納言にとって唐土体験の最たる出来事である皇子の母唐后との一夜限りの逢瀬及び正体判明をめぐる極私的な体験を除けば、彼の言動は宮廷を初めとする唐土全般の見聞が中心となる。主人公の見聞では時にはいわゆる地の文の叙述と一体化しつつ、唐土の権力者一の大臣やその娘五の君による率直な言動等に対し日本との対比で批判もする一方で、唐土の故事と名所の案内にもなっている。その際、渡唐物語として『浜松』に影響を与えている『うつほ物語』では全くの異郷として描かれるのとは対照的で、日本を専ら比較基準とした『浜松』における唐土の事物描写は真の異郷には見なし得ないのかもしれない。

ただ『浜松』の渡唐においては、唐土の景物や人物をめぐる出来事から価値のある来歴いわば〈ゆゑ〉を見出すことこそが重視されているのではないか。唐土の宮廷の〈ゆゑ〉である「ほうか殿」の七夕の宴にまつわる西王母や東方朔の故事は紹介のみだが、渡唐二年目の新春に訪れた「桃源といふ水のほとり」の桃林が岸辺に「うるはしく並み立ちて開け渡りたるさま」を見た中納言の感動は、「はるかに伝へて文のことども

を見しを、あらたに見つるも、我ながらめづらしく、人より殊におぼし知らる」であった（P 169、小P 55）。この場合の〈ゆゑ〉は日本に伝来した漢籍により既知とはいえ、故事の舞台を「あらたに見つる」までに強い関心を見せていよう。

唐后に関わる見聞についても弾琴と容貌のすばらしさが唐土の至上の美として語り伝える価値を認めると共に、渡唐の意義を高める上で〈ゆゑ〉が追求されているのだろう。ただし、そこには中納言自身が身を置く日本の貴族社会からすると考えもつかない『源氏』正篇Ⅱ日本の〈前代〉を連想する政治事情と日唐両国にわたる親子の〈流離〉の〈ゆゑ〉——『源氏』を超える程の劇的な事情——を伴っていたのである。この唐后と、元来傍観者でしかない客人中納言とを繋ぐのが、唐后の「本体」をめぐる特別な母子の縁に加えて、中納言自身と父宮転生の三の皇子及び若君との繋がりにより中納言自身の〈ゆゑ〉も組み込まれたかけがえない宿縁であろう。だからこそ、他の唐土の見聞の場合とは異なり語り草にしてしまえない、「あはれにかなし」と心惹かれ愛執と一体化した執着となったのではないか。中納言は唐土到着時に『源氏』須磨巻の十五夜場面をなぞって異国における望郷の思いを吐露してはいる。^②ただし、不遇や悲哀を深める流離という意味合いでは、特に唐后との逢瀬に伴い若君を介して親子の宿縁へ組み込まれる事により近しくなった唐后親子の真の流離を、帰国後も彼女の文を見る事・母の「本体」を聞く事で、前掲「身にしみ返」（P 261、小P 192）る〈体験〉とした事になるのかもされない。

その中納言が帰国後、京の日常生活の場で隔てなく、理想的に語らう大将大君にも唐后に関わることを語り得ないのは——唐后の文箱を開封へと駆り立てる心情となり得るのは——、恋の心情に妨げられるといっただけでないだろう。その際言及されている後の美質と共にこうした「本

体」に関わる秘事を〈ゆかり〉Ⅱ血縁でない他者にさらけ出せば、この後見聞し関わる中で唐后の一族をめぐる劇的な〈流離〉の宿世の中に組み込まれていく中納言自身の〈ゆゑ〉を揺るがしかねないことへの躊躇いと巻二の時点では漠然と連動しているためではないか。その背景として中納言が唐土で見聞し帰国後も追い求めるところの唐后に劇的な〈流離〉の宿世と深い親子の情を呼び起こす〈前代のゆゑ〉が、現実自身を置く京の日常生活即ち政治的に平穏な日本の貴族社会の状況と隔たり過ぎて語り草以上の意味を与えられない事情が推察されよう。

本稿は巻一中心に渡唐の意味を論じたため検討は巻三前半に留まるが、以降続く京の日常生活で唐后の事を語ることをめぐり中納言が躊躇うあり方は、在唐時の客人としての見聞が主体の体験共々、『源氏』続篇に準じた現環境と対照的だからこそ、『源氏』正篇を超えた〈前代のゆゑ〉を強く求める渡〈唐〉物語たる特徴ではないか。

注

- ① 藤岡作太郎『平安朝文学史』岩波書店、一九二三、四章P 536～538。また宮田和一郎『物語文学攷』文進堂、一九四三や石川徹『古代小説史稿』刀江書院、一九五八等の論有。
- ② 『浜松中納言物語』本文の引用は『篁物語 平中物語 浜松中納言物語 日本古典文学大系』岩波書店、一九六四の松尾聡校注本文（略称：大系）に拠り、池田利夫『浜松中納言物語 新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇一（略称：新編全集。引用時小Pとして該当頁を併記）、中西健治『浜松中納言物語全注釈』和泉書院、二〇〇五（略称：全注釈）、稿者も参加した浜松中納言物語の会『浜松中納言物語巻一注釈』私家版、二〇一二（略称：浜松の会注）等を参考に表記を改めた。当該頁の引用のうち、傍線部「あひ」は新編全集で「あいぎやう、」に校訂。なお唐后の美質は垣間見時と対照的に逢瀬後は日本の「なつかしき」美的基準を賞賛される。神尾暢子「松浦宮の女性美—桐壺更衣と楊貴妃—」（『言語文化研究』七、

- 二〇〇・三)。
- ③ 松浦後掲注²⁸ I論文で語り方を検討。
- ④ 楊貴妃に喩える表現共々の桐壺更衣継承は、全注釈、浜松の会注、岡部明日香『浜松中納言物語』における白詩の受容―唐后の造型を中心に―(『白居易研究年報』八、二〇〇七・一〇)で指摘。
- ⑤ 『源氏物語』の引用等は阿部秋生他『源氏物語 新編日本古典文学全集』全六巻に拠り、巻名と冊次・頁を付した。
- ⑥ Royall Tyler: "Sagoromo and Hamamatsu on Genji: Eleventh-Century Tales as Commentary on Genji monogatari" (Nichibunken) Japan Review (International Research Center for Japanese Studies) 18 (2006) P4
- ⑦ 式部卿宮が当帝唯一の男宮である点は更に平穏な継承といえる。ただ成立期にない式部卿宮立坊に敦康親王立坊を望む史的背景を読み取る久下裕利「孝標女の物語」(『平安後期物語の新研究』新典社、二〇〇九)の見解もある。前春宮薨去例の少なさも中西健治「人物構想論―その序説・式部卿宮をめぐる―」(『浜松中納言物語の研究』大学堂書店、一九八三)で指摘。摂関家内部や後宮の対立等の政情を含め兼ね合いを考える必要はあろう。
- ⑧ 西本寮子「浜松中納言物語における皇女降嫁」(『国文学攷』一一六、一九八七・二)。
- ⑨ 神尾暢子「官職呼称の人物映像―堤中納言の権中納言―」(『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二)。中納言の年齢は巻四最初の時点で皇女降嫁を辞退する言葉(P 327, 小P 289)から、全注釈当該補注の見解通り二十一歳頃と考えられる。また官職は、久下注⁷論文で地位の近似を史的に指摘する摂関家のおし衛門督より相当年下での任官だろう。中西健治「浜松中納言物語の成立年代への一視点」(『浜松中納言物語論考』和泉書院、二〇〇二初出)で権官職と成立年代を推定。
- ⑩ 蜀山の唐后及び丁里の女王(后)の女房(後の女房)を訪問の各場面での新編全集・全注釈指摘
- ⑪ 伊藤守幸「『浜松中納言物語』の反中心性」(『文芸研究』九七、一九八一・五)
- ⑫ 菊地仁「『浜松中納言物語』の在唐巻―源氏物語からの照射―」(『日本文学論究』四五、一九八六・三)。唐帝皇子への転生には『今昔物語集』清範説話の影響が勿論ある。
- ⑬ 中納言自身、女性関係一般で唐土の「かりそめのほかの人」と自覚する(P 181, 小P 73)。
- ⑭ 唐帝との恋情の共有によりあたかも后との恋をする資格を付与された効果か。岡部注⁴論文は、唐后に『長恨歌』引用による楊貴妃に加え上陽白髮人及び桐壺更衣の造型が重ね合わされると共に、中納言の返歌「遠山鳥」歌を通じて唐帝との愛から遠ざかり、中納言との愛へと移行させていると論じる。なお、前述の点は薫の見る意味合いと異なる。
- ⑮ 神田龍身「『浜松中納言物語』幻視行」(『文芸と批評』五・五、一九八〇・一二)、菊地仁「『浜松中納言物語』試論―主人公の聖性をめぐって―」(『日本文学論究』四五、一九八六・三)。なお、中納言が帰国後の巻四で「官位をとられ、おほやけの罪にあたらん、苦しかるべきにあらず。」(P 334, 小P 298)と思いつめているのが后思慕に対する禁忌(大系・全注釈解)ゆえだとしても、菊池論文の指摘通り、帰国後に生じた意識であろう。
- ⑯ 唐帝男皇子三人の予言で密通露頭の危機が生じるが、この点では密通により誕生した薫と光源氏の子三人の予言との関連に似る。
- ⑰ 「世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて」(『花宴』P 360)をなぞる。菊地注¹²論文。一方、朧月夜の人物設定継承を諸論で指摘の一大臣五の君には薫的な禁欲的態度を取る。
- ⑱ 前者は神田注¹⁵論文や八島由香「『浜松中納言物語』における〈あくがるる心〉」(『論輯』二八、二〇〇〇)、後者は金治幸子「『浜松中納言物語』論―中納言の母性希求と唐后の造型をめぐる―」(『日本文学』三七・三八、二〇〇一・二、二〇〇二・二)上編や八島由香「『浜松中納言物語』における〈不孝〉」(『論輯』三一、二〇〇三)等。
- ⑲ 中西健治「唐后の人物設定」(『浜松中納言物語の研究』大学堂書店、一九八三)や金治注¹⁸論文下編
- ⑳ 皇位継承から遠い親王の名誉職と解される。上野宮の一条朝以降例及び親王の筑紫配流例は未見。
- ㉑ モチーフの近似が指摘される二作品の先後関係は後藤康文の論がある

が今後更に検討を要す。

- ②② 『狭衣』新編(全集当該注等。野村倫子「飛鳥井姫君の九州」(『源氏物語』宇治十帖の継承と展開)和泉書院、一九八八初出)で叙述の諸相を検討。なお浮舟の継承も課題。
- ②③ 中西健治「聞きどころ」について(『浜松中納言物語の研究』大学堂書店、一九八三)
- ②④ 伊井春樹「浜松中納言物語の方法」(『源氏物語論考』風間書房、一九七八初出)等
- ②⑤ 恋の宿世の捉え直しは森岡常夫『平安朝物語の研究増補版』風間書房、一九八一や菊地注⑫論文、孝養の宿世融合は安藤享子「『浜松中納言物語』における恩愛」(和洋国文学研究二二、一九七九)や八島由香「『浜松中納言物語』における親子のつながり」(『別冊論輯』二〇〇三・二二)、母恋い・子別れの連鎖は金治注⑮論文。久下晴康(裕利)「唐后転生への道」(『平安後期物語の研究 狭衣浜松』新典社、一九七六初出)
- ②⑥ 助川幸逸郎「『浜松中納言物語』と物語の彼岸」(『狭衣物語空間／移動』翰林書房、二〇一一)は、渡唐までして再会した父の転生への失望の代償として論じる。
- ②⑦ 菊見・別れの宴の各弾琴、逢瀬時の心象融合の流れは久下注⑮論文参照
- ②⑧ 松浦Ⅰ「『浜松中納言物語』卷三考」(『日本文学』二七、一九九〇・一一)、Ⅱ「『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言いつくろい考」(『論究日本文学』五四、一九九一・五)、Ⅲ「『浜松中納言物語』の大式考」(『平安後期物語の新研究』新典社二〇〇九)
- ②⑨ 「長河」での六月祓などは、浜松の会注で示す通り、三の皇子が個人的に中納言を「具し給ひて」行ったものである(P186、小P79)。唐帝は限定的に連続して登場する場面内を除けば、主語の明記なしに登場することはないため、この六月祓は他の注釈で解するような、唐帝が「三の皇子・中納言具し給ひて」の行幸とは言い難いのではないか。
- ③⑩ 三角洋一「唐土にたたずむ貴公子たち」(『日本を意識する』講談社、二〇〇五)。
- ③⑪ 伊藤注①論文
- ③⑫ 菊地注⑫論文。